

韓国漢字音の重層性：日本漢字音との比較対象を中心に

蔡, 京希
九州大学大学院（博士課程）

<https://doi.org/10.15017/11963>

出版情報：語文研究. 64, pp.65-75, 1987-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

韓国漢字音の重層性

— 日本漢字音との比較対照を中心に —

蔡 京 希

朝鮮漢字音については、今まで例えば次の如き諸説がある。

。Henri Maspero: 「Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les

T'ang」(B. E. F. E. O.1920)

。Bernhard Karlgren: 「Philology and Ancient china」

。有坂秀世: 「漢字の朝鮮音について」(『国語音韻史の研究』)

。河野六郎: 「朝鮮字音母胎論」(『河野六郎著作集2』)

。朴炳采: 『古代国語の研究』

その他

日本漢字音は古音、呉音、漢音、中世唐音、近世唐音の如きいろいろな系統の音が併存しているのに対し、朝鮮漢字音は一系統の字音のみであると言われる。しかしそこには古い要素と新しい要素が混在しているという重層的性格が認められる。而して、それについては△④原音的に二つ以上の系統が混じっている為▽なのか△⑤韓国国内の変化による▽のか或いは△⑥我々に混在的と見えるだけであ

り、実際は中国の或方言音にそのような体系があったのか▽は重要な課題となるのである。

結論的に言って私は③の考え方に傾いているのであるか、その研究方法としては、一応次の如き手続きをふむ。

①韓国語自体の音韻史研究

②中国語音韻史との比較研究

③日本漢字音の諸種との比較対照研究

理論上から言えば①②を重視するのが妥当であるが、私の研究テーマが日韓両国語の比較対照研究であるというような事情もあり、△中国音韻史上いろいろな変化過程を反映していると云われる日本漢字音▽との比較対照考察に重点をおきたいと思う。

日本漢字音の資料としては、諸先覚の紹介されたものに基づく面が多いが、韓国資料としては『六祖寶壇輕譯解』(1496年、国語学資料選集、一潮閣、左記⑧)をはじめ多くの文献資料、或いは現在韓国漢字音(方言資料を含む)等をフルに活用した。

前述の如く日本漢字音資料としては大矢透氏、有坂秀世氏、中田祝夫氏、馬淵和夫氏、築島裕氏、小林芳規氏、小松英雄氏、高松政

雄氏、沼本克明氏、その他数え切れない程多くの先覚の紹介を利用して
させて頂いたが、本稿の場合は特に後述の如き奥村三雄氏の所蔵本
や調査諸資料（未発表）、或いは「日本漢字音の体系」（訓点語と訓
点資料第四輯）その他に示された左記諸資料を中心とした。

・吳音…『法華单字』『心空王法華經音訓』

・漢音…『例時作法』『法華懺法』（文亀二年本）

・中世店音…『諸回向清規式』（永祿本）

・近世唐音…『法華經普門』の黄槩本（天和二年刊）貝葉本（刊
行年次未詳）

韓国の資料としては非常に多くの資料をとりあげた。

④『楞嚴經諺解』（1462）⑤『法華經諺解』（1462）⑥『金剛經諺解』

⑦『阿彌陀經諺解』⑧『圓覺經諺解』（1465）↑以上韓国古典叢書刊行、

大提閣 ①『世宗御製訓民正音』（1446）②『月印釋譜』（1459）③『六

祖大師法寶壇經諺解』（1496）↑以上国語学資料選集、一潮閣 ④『方

言集釈』（1778）⑤『倭語類解』（1704成1783刊）等々。

ここで『六祖寶壇經諺解』を中心資料としたのは次の如き理由に
基く。①経文資料である為、前記日本漢字音資料との対照に便利で
ある。②いわゆる人工音の要素が少ない等々。

尚『金剛經諺解』や『阿彌陀經諺解』の類には人工
的要素の少ない本もあるらしい。奥村三雄氏書写資料（未発表など
は人工的要素が少ないが、少なくとも私の見たテキスト（大提閣本）
では前記訓民正音等に準ずる人工音的要素が含まれている。

例えば③声母に関して「公貢 供 恭 規 飢 几 姬 記
機 居 挙 故 孤 古 顧 固 具 拘 改 該 皆 措 誠
乖 怪 界 根 君 官 管 觀 堅 見 高 交 教 歌 迦

戈 果 過 嘉 駕 瓜 光 廣 剛 薑 庚 梗 耕 京 鏡
敬 竟 驚 經 鉤 鳩 久 九 金 錦 今 兼 穀 菊 吉
結 各 脚 隔 噉 燉 急 給 國（清）。空 恐 器 起 氣 去
氣 去 枯 苦 開 區 困 俱 可 卿 口 丘 謙 麴
骨 乞 屈 客（次清）。葬 蚤 祈 懼 勤 近 群 強 狂
求 舊 琴 局 及 極（濁）の字音表記は、奥村氏の資料では
大体「ㄱ」であるが、大提閣本では大体「ㄱ（清） ㅋ（次清） ㆁ（濁）」
の区別が存する。こんについても大提閣本が古い韓国語字音資料で
あるという考え方もあるが、私はむしろ東国正韻などと同様、人工
音的要素の多いものと考えたい。即ち中国の韻書等による知識的な
区別であり、実際問題としてそのような発音の区別は余り一般化し
なかつたと考えたい。東国正韻に関する字音変化、人工音的要素に
ついては例えば河野六郎氏の「再び「東国正韻」に就いて」（『河野
六郎著作集2』）等を参照のこと。

⑥奥村氏書写資料では「中、重、除」など舌音二、三等字の子音
に「ㄷ」「ㄷ」両形が存するが（「除」は「ㄷ」の表記だけ）、大提閣
本ではほぼ「ㄷ」に統一されている。これも大提閣本が古い形を示
すとも言えるがむしろ私は当時の韓国字音は既に或程度「ㄷ」
の傾向を示していたと考えたい。つまり大提閣本はやはり東国正韻
等と同様、韻書にひかれて「ㄷ」形に統一したとも考えられるわけ
である。

二

日本では、古音、吳音、漢音、唐音というように各時代に輸入さ

れた漢字音がそのまま残っているが、韓国漢字音は一応「一つの体系」に整理されて来たと言われる。「一つの体系」の意味は、④「各時代に輸入されたものが混在して一つの体系に整理された」のか、⑤「或時代に輸入された一系統の字音のみが残り、他はすべて捨て去られたのか」の二つが考えられる。従来は⑤の考え方のみが目立った。例えば、有坂氏の十世紀の宋代開封音説、河野氏の唐時代の長安音説(慧琳一切経音義等に近い)等である。しかし私はむしろ④の考え方に傾いている。つまり現在(李朝も含めて)は一つの体系におさまっているようだが、そこには古い時代に入ってきた要素と新しい時代のものとが混在しているのではないのかと考える。

その多くの部分は日本の漢音よりやや新しい時代の原音(有坂秀世氏説に近いのか)を反映するようだが部分的にはもっと古い要素も混じっているのではないか、ということ強く主張したいのである。

日本漢音にも種々の性格のものが混じっているが、奥村三雄氏所蔵本や同氏の調査資料(未発表)、「訓点語と訓点資料」四集、「国語国文」33—2号所掲論文等によると、いわゆる新漢音(眞言宗や天台宗の声明や読経音資料系)では次の如く入声語尾消失過程を示すらしい例が或程度見られる。「跡セイ(法華經安樂行品慈惠大師本)、尺セイ(東大寺本大咒經)、薄フア(般若理趣經古本)、各カ(文龜本法華懺法)、白ハイ(幸甚云本声明例時)、佛フ、弗フ、薩サ、曰イ、釋セ、十シ、執シ、法ハ、食シ、力リ、極キ(以上いずれも法華經安樂行品山家本)……」

尤も右記の中には発音の都合その他の事情により臨時に入声音を省いた例もありそうだが、しかし右記の例がすべてそうであるとは

考えない。新漢音原音に於ける入声韻尾の消失の過程を示す例もあると考へたい。有坂秀世氏の「入聲韻尾消失の過程」(『国語音韻史の研究』参照)。

三

先学の説の中には韓国漢字音の原音を日本の呉音或いはそれに準ずる古いものとする考え方もある。例えばマスペロ氏の「5Cの中国南方言」、カールグレン氏の「7C前後の隋唐時代」、朴炳采氏の「6、7Cの切韻音(吳方言江東音の影響)」、辛容泰氏の「六朝期江東、江南音」(『韓国漢字音の母胎に関する考察』国際大学人文科学研究第一輯1982)。

しかし、これは無理だろう。部分的には古い要素らしいものもある程度認められるにしても現在韓国漢字音はいろいろな面においてもっと新しい中国語音、おそらくは十世紀頃のその反映とみられる。例えば、

④いわゆる明母泥母の字音がそれぞれm-n-形をとる故を以て、日本漢音(明母Ⅱバ行、泥母Ⅱダ行)よりも呉音(明母Ⅱマ行、泥母Ⅱナ行)に近いと判断することはできない。即ち日本漢字音中、最も新しい唐音でもそれぞれマ行ナ行表記をとるからである。むしろ漢音のバ行ダ行表記をごく特殊だと考えるのが妥当であろう。(現在の中国語諸方言をみても、それらがb-d-或いはm-n-の如き形をとるのは西北方言や閩語系などごく一部の方言に限られる。)

ここで注目すべきは韓国漢字音で日母が李朝の資料で△表記をとることだろう。「△」を、「Z」音記号と見る通説に従えば、日母は

非鼻音化しているわけであり、明母泥母の m n も呉音などに準ずるような古い音とは考え難くなるわけである。尤も現代音における「女」여 [n] (少類) の両音併存形等からして、現在音の「이」(二) 일 (日) …… の類を「니, 닐」の変化と考えれば、李朝漢字音資料系よりも古い姿を反映することになるが、今はその主張をさしひかえる。即ち韓国語音韻史から見て「니 [ni] ↓ 이 [i]」の変化の方が自然なようだが、[ㅁㅅㅆㅈㅊ] (秋、ロムシ) [ㅍㅌㅍㅌ] (ロムシ) (村) など「ㅁㅅ」△[Z]。[] の変化もあるわけだし、第一、現在の漢字音に李朝漢字音と別系の古い字音要素が残っているという考え方は不自然に考えられるからである。

⑧ 止摂諸韻の歯音四等の「支韻」斯、雌、紫、(脂韻) 私、死、四、肆、自、次、姿、怒、(之韻) 祠、寺、嗣、伺、思、司、絲、筭、慈、字、滋、子、恣、詞、似」は、朝鮮漢字音では「o, e」形をとる。これらの止摂諸韻は呉音と漢音では他の頭子音の場合と同様「イ」になっており、唐音では「ウ」になっている。

⑨ 模韻は大體「오, o」の母音であるが、中に「杜、肚、蠹、妬、數」が「우, u」になっている。呉音と漢音がすべて「オ」を表わし、唐音が大體「ウ」を表わすことから見ると「オ→ウ」の変化過程を反映すると考えられる。

⑩ 虞韻は大體「우, u」母音をもつ。歯音四等の「取、娶、聚」は「취, chwi」の形で近世音と関係ありそうである。近世唐音「チウ」

⑪ 灰韻は唇音「이, i」(杯、裴、背、枚、妹) と舌音「對, 내」の少数形を除くと皆「외, oi」の母音となる。(礎、頽、退、崔、罪、雷、類、灰、回、誨など) [œ] の如き形か。呉音漢音「ウイ」唐音「ウイ」

韓国内部での変化によるものは、④ 輸入時変化したもの⑤ 輸入後変化したものに分けられる。

④ 輸入時の変化

。e ↓ je 化

古代韓国語では e 母音が存在しないため、e を je に受け入れた。ローランド・ラング氏 (文献資料に反映した中世日本語エ列音節の口蓋性) 『国語学』第85集) は朝鮮資料 (『伊路波』) の表記から日本語のエ列母音に、[kje, [sje] [tje] の様な音価を推定するが、「蒙古文字韻」(308) で八思巴文字「e, é」を「여」にうつしていること、また中国語原音 e 韻に口蓋的グライドの有無の如何にかかわらず「예」表記が目立つことから (尤も、「頤、揭」等、少数に「예예」の両方が現れる。「예」はその意識的な区別と言うべきか)、へ、テ、ネは ke, te, ne のこと音だったとする浜田敦氏 (『朝鮮資料による日本語研究』奥村三雄氏 (『エ列母音』) 『講座国語史2』音韻史・文字史) の説に従うべきかと考えられる。

濁音 ↓ 清音化

例えば、韻書の濁音「葵、蛭、祈、渠、勤、近、群、強、狂、求、舊、琴、局、及、極」などがすべて清音「ㄱ」に表記されている。

入声韻尾 t ↓ l 化

入声韻尾「t ↓ l」の現象は、韓国内での変化によると思われる。「三国史記」の高句麗百濟の地名表記で (俞昌均『韓国古代漢字音の研究』I II)、また新羅の郷歌表記や 12 C 高麗方言を反映する「難林類事」で (朴炳采『古代国語の研究』) 舌内入声字 t がすべて語末 l 流音になっていることを既に明らかにしている。

◎輸入後の変化

。au↓o化

李朝漢字音では豪韻は「o」(刀、倒、道、陶、曹、早、操、騷、勞、老、袍、毛、寶、報、帽、高、考、好、號)形をとる。而してこれはoの反映ではなく李朝音ではauに当る二重母音がないので、単母音化した形で代置されたものとも思われる。

。r↓n化の化

例えば、龍 利 量 禮 儼 良 兩 嶺 留 流

林 盧 羅 楞 等李朝の「ri」表記が、現在韓国漢字音では「o」「n」の表記になる。

。「肉」如人 忍 日 然 若」などの「ri」表記を持つものが、現在韓国漢字音ではすべて「o」「n」表記になる。

四

▲現在韓国漢字音に関し、日本漢字音よりやや新しい時代の中国語音を基盤とする要素が多いという私の考え方は、これを▲十世紀頃の宋代開封音に基づく▼とする有坂秀世氏の説(「漢字の朝鮮音について」▲国語音韻史の研究▼)に近いようだが、しかし私は有坂氏の説よりも強く、もっと古い時代の要素も含まれていると主張したい。つまり▲現代韓国漢字音は日本漢字音と異なり、一つの体系におさまっているようだが、そこにはかなり古い時代の要素の残存も認められる▼と考えるわけである。韓国漢字音に関し、日本の漢音の原音より古い時代の要素を反映すると考えるのは、例えば

次の如き現象である。

(A)韻鏡でいう三等四等の区別は古いだらう。――日本の漢音は勿論、呉音にもその区別は殆んど認められない。万葉仮名にその区別が或程度認められる。(イ列乙類は三等、甲類は四等など) 韻鏡の三、四等の牙音喉音唇音三等字が非口蓋的中舌的な子であり、四等字が口蓋的前舌的な子を介母とすることは既に有坂(「カールグレンの拗音説を評す」、河野(「有坂博士と所謂「重紐論」」)両氏によって明らかにされている。朝鮮漢字音では、韻鏡の三等字は直音、四等字は拗音形をとる。ただし効撰の宵小笑韻と梗撰の庚梗敬韻三等だけは拗音になっている。日本呉音でも庚梗敬韻三等は拗音になっている。

△三等四等両属韻▽

鍾			東			韻
喉	唇	牙	喉	唇	牙	声母
擁 ㄹ	奉 峯 封 ㄹ	恐 恭 供 ㄹ	雄 ㄹ	風 楓 ㄹ 夢 鳳 福 ㄹ (ㄹ)	窮 弓 ㄹ	三 等
		[oŋ]			[uŋ]	
			融 ㄹ			四 等
			[juŋ]			
	勇 用 容 ㄹ					
	[joŋ]					

虞			魚		之		脂			支						
喉	唇	牙	喉	牙	喉	牙	喉	唇	牙	喉	唇	牙				
雨遇芋우	布怖輔오	無武務父敷우	區拘俱懼우	於虛어	語御渠去居舉魚어	醫意喜의	疑其蘄起基姬記의	位위	龜위	眉美備悲이	器飢弃의	爲委위	偽跪위	皮被彼이	宜儀義奇寄의	
	[o]		[u]		[ə]							[ui]			[wi]	
喻유			與餘어		異이		維遺위↓유	兗季위↓유	夷伊이	比毗鼻이	棄이	悲墜(위↓유) [ju]↓[ju]	窺規유	易이	彌婢譬卑이	蚊企이
[ju]			[jə]									[ju]				[i]

陽		麻	宵		仙		眞		祭		齊					
喉	唇	牙	喉	唇	牙	喉	唇	牙	喉	唇	牙	喉	唇	牙		
	亡岡妄房方放양	仰強薑양	夭妖요	苗廟요	喬驕요	偃언	免辨變언	乾件언	憫密貪인(일)	銀僅은	偈에					
		[aŋ]			[jo]			[əŋ]		[un]	[əi]					
陽養양			耶夜野야	腰遙요	眇妙漂요	延演연	便面연	甄연	引因印인	民蜜頻인(일)	吉緊인(일)	喫幣에		瞥에	閉에	啓雞計에
[jaŋ]			[ja]					[jəŋ]		[in]						[jə]

蒸			鹽		尤			清		
喉	唇	牙	喉	牙	喉	唇	牙	喉	唇	牙
蠅應 음	泳永 ㅇ	凝矜 음		儉檢 음	有憂優 우	浮婦復副不 우 謀 오	求舊丘久九救 우			
孕 ㅇ		[wŋ]	儼艷 염		遊由 유		盈 영	屏名 명		輕 영
[iŋ]			[jæm]							[jœŋ]

有坂、河野両氏は、朝鮮漢字音の唇音の \pm についてはふれていないが、朝鮮漢字音の唇音 \pm 等は直音を反映する場合がかなり多い。しかし、唇音拗音は軽唇音化が起ると共に消失するという頭子音の性格に係る問題である故、朝鮮漢字音の唇音での直音形が \pm の反映を見せるものであるか否かは判断が難しい。軽唇音化は唐代に起り、中舌乃至後舌母音を持つ韻に起りやすいと云われるか、未だにその条件が明らかになっていないようである。唇音に於ける \pm と \pm の区別は、安南音がはっきり見せてくれる。三根谷徹氏の『越南漢

字音の研究』（東洋文庫S47）参照。

①韻鏡で言う一等重韻及び二等重韻の区別が見られる。

一等重韻及び二等重韻の泰 \pm 台 \pm 佳 \pm 夬 \pm 皆 \pm 談 \pm 羸 \pm 銜 \pm 成 \pm 冊 \pm 山 \pm 庚 \pm 耕 \pm （即ち、A類韻の長母音系・上古音a系から由来・B類韻の短母音系・上古音ə系から由来）韻は、唐代慧琳音ではすでに合流してしまう。

日本の漢音においては重韻の区別は、ほとんど表さず、咸韻・銜韻だけに区別が少々現れる。例えば咸韻での「讒セム瀧セム」。

呉音でも一等重韻及び二等重韻は区別なく相通するが（共に「ア」に反映）、〈合韻〉擬ゲ〈皆韻〉疥ケ〈羸韻〉貧トム紺コム〈咸韻〉咸ゲム減ゲム〈山韻〉辯ベン間ケン山セン限ケン、などの区別が残っている。

朝鮮漢字音でも重韻の相通側が目立つが、蟹撰のA類韻が「ア（a）」「B類音が「オ（ə）」形をとるような数的優越が見られる。咸撰山撰梗撰は相通してしまうが〈羸韻〉羸者慘合〈咸韻〉恰音〈山韻〉限者」とのような重韻の区別が多少見られる。

以上、日本呉音と朝鮮漢字音では、一等二等重韻の相通例が多いが、中古音体系の一等二等重韻は、実は魏晉南北朝字音を反映する『經典釋文』でも相通を示している。『經典釋文』で一等重韻及び二等重韻は各撰内においては相通併合している。また咸撰内では母音の近似から一等と二等の相通例があるという。（『魏晉南北朝字音研究』坂井健一）

②入声字の反映
陽韻韻尾-m ng（-p -t -k）は上古中古漢語には明白な区別があった。韓国漢字音では、入声韻尾-p -t -kが「ㅍ（p）、ㅌ（t）、ㄱ（k）」

蒸韻(曾撰、周代古音(台部中心母音)ə)、耕韻(梗撰、周代古音(成部中心母音)e)・登韻(曾撰、周代古音(台部中心母音)ə)の区別は失われており、日本唐音もその失われた形を反映している。

〈清韻〉呈(成)聖(經)清(請)「*ə*」*ə*「*ə*」ヤウ(埃)イ(埃)ン(蒸韻)應(應)ウ(ウ)ヨウ(ウ)イ(エ)ン(耕韻)シ(シ)シキ(シ)シキ(耕韻)耕(莖)莖(莖)キョウ(カウ)、脉(麥)イ(マ)ウ(マ)ク(登韻)能(僧)楞(レ)ン(ウ)オウ(ウ)ン、得(德)号(トク)トク(トク)テ(テ)ツ

日本呉音と漢音、朝鮮漢字音では右で分るように清韻・蒸韻、耕韻・登韻の区別を反映する。

⑤ 遇撰諸韻が切韻音系では模韻 *uo* (â) *â* *o* *uo*、魚韻 *iō*、*iā* *iā* *iō*、虞韻 *iū* (*uā*) *iuā* (*iu*) *iu* になり、獨立してしまふ。また中世になると模韻は *u*、魚韻は *ju* に合流する。この中世音を反映しているのが日本唐音である。

如「*ə*」*ə*「*ə*」イ(イ)ヨ(ヨ)オ(オ) 虚「*ə*」*ə*「*ə*」ヨ(ヨ)ヨ(ヨ)ヨ(ヨ) 餘

〈模韻〉歩(徒)度(古)五(相)慮「*ə*」*ə*「*ə*」イ(イ)イ(イ)イ(イ) 數「*ə*」*ə*「*ə*」イ(イ)イ(イ)イ(イ) 句(夫)無「*ə*」*ə*「*ə*」イ(イ)イ(イ)イ(イ) ユ(ユ)主(樹)「*ə*」*ə*「*ə*」イ(イ)イ(イ)イ(イ) ユ(ユ)

右で見るように日本漢字音の呉音漢音の魚韻が模韻と同じく「オ」形をとるのは *ə* を写す音韻としては「オ」しか持たない日本語の特性のゆえである。結局日本の呉音漢音と朝鮮漢字音とを比べて見た場合、遇撰諸韻はそれぞれの言語的特徴をよく反映していると思われる。

五

以上、私は日本漢字音との比較というような観点を中心に韓国漢字音の重層性を考えた。而してこの研究はあくまで韓日漢字音の比較ということが中心であり、韓国漢字音の古さという事については今後の研究にまつべき面が多い。例えば韓国漢字音の原音が日本漢字音の原音と同じ方言に基づいたものでない限り日本漢字音との比較のみから韓国漢字音の古さを論ずるべきでないこと、言をまつまい。

方言の差と言えは或時代の或中国語方言において△③いわゆる三等四等の区別や入声韻尾 *-t* *-k* を保存し▽つつ、而も△④日母が非鼻音化し、止撰四等音の音変化がおこっていた▽というような可能性も全くないとは言えない。もしそうであるならば、私の重層性という考え方自体も検討の必要が生じてくるわけだが、しかし右記の如き状態の方言の存在を示唆するような資料は今の所見当らない。そのような資料が提出されない限り、私は一応韓国漢字音の重層性を信じた。

朝漢	韻書	『六祖大師法寶壇經諺解 (六祖壇經)』
平	平	恭 江 降 基 斬 艱 間 官 袈 罽 剛 經(經) 句 金 東 中 知 珠 刀 張 悲 夫 分 供 更 邊 波 方 宗 師 身 眞 新 山 袈 相 生 聲 心 三 僧 依 希 虛 虛 詞 香 / 天 慈 初 遷 千 清 / 奇 其 斬 伽 求 童 徒 圖 臺 田 傳 堂 呈 菩 房 凡 提 時 神 禪 韶 成 / 疑 言 源 尼 能 難 南 無 迷 梅 門 摩 明 餘 貧 陽 遊 留 流 林 龍 如 盧 來 人 輪 然 僚 撩 羅 良 楞 應
	上	典 史 / 取 / 弟 死 / 五 廊
	去	傳 店 意 / 住 第 步 座 / 願 念
	入	猶 荅 得 百 / 滅 脉
上	上	講 古 果 久 斷 寶 所 訶 數 濟 左 海 火 / 取 / 重 代 丈 范 士 罪 善 上 下 / 有 右 禮 忍 若 兩 嶺 養
	去	貝 駕 頓 并 變 讚 障 姓 性 聖 / 要 化 向 / 勸 配 / 偈 度 大 頌 寺 淨 / 夢 妄 用 爲 利
	入	客
去	入	猶 各 急 德 福 鉢 壁 法 北 室 薩 作 識 一 惡 / 切 / 佛 別 俗 實 寂 十 學 / 業 密 蜜 六 肉 日
	上	本 子 祖 主 者 / 受 / 免
	去	過 敬 鏡 對 世 秀 / 請 / 地 陣 樹 尚 授 / 位 量

Ⅱ 声調についてⅡ

朝鮮漢字音の声点は、中国の伝統的な四声に従う東国正韻式の声点法と韓国語特有の声調体系に従う現実漢字音の声点法に分かれる。

東国正韻式漢字音の声点は、韻書の調類と一致するもので、1447年から1485年までの資料にはこれしか見えない。

はじめて現実漢字音の声調が現れるのが、1489年の『求急簡易方』であり、1496年の『眞言勸供』と『六祖法寶壇經諺解』のあたりになると声点が鮮明で資料としては信頼が置ける。これらの文献に於ける声調の歴史は17Cの前年までに行われる。

ここでは『六祖法寶壇經諺解(六祖壇經)』の差声状況を示すことにする。

計	清濁	濁	次清	清	朝漢	
					清濁韻書	
107	33	22	6	46	平	平
					上	
					去	
7	2	2	1	2	上	上
					去	
					入	
8	2	4		2	上	上
					去	
					入	
6	2			4	上	上
					去	
					入	
30	7	9	1	13	上	上
					去	
					入	
27	6	6	2	13	上	上
					去	
					入	
1			1		上	上
					去	
					入	
7	1	1		5	上	去
					去	
					入	
14	2	5	1	6	上	去
					去	
					入	
29	6	7	1	15	上	去
					去	
					入	

古く切韻時代の声調体系は、平上去入の四声体系であったが、中古から近世にうつる時期に現代の北京官話音の声調体系である陰平(清、次青、入声の清次清)陽平(濁、清濁、入声濁、入声の清次清)去声(去声上声濁、入声の清次清濁)の声調体系になる。

「六祖壇經」に於ける朝鮮漢字音の平声は調類の平声が83%調類の上上去入が41%になる。右の表で分るように、現代北京官話で見られる入声全濁字の陽平への移動、入声清声字の陽平陰平への移動のような清濁觀念とは関係なく(調類の入声清濁字は北京官話では去声に入るが②では平声に入る例が2例ある)清濁はほぼ同一の比率で反映する。

上声は、調類の上声去声が98.3%調類の入声が17%になる。

去声は、調類の入声が58%調類の上声去声が42%になる。

以上、右の如く朝鮮漢字音の声調体系についてもやはり古い要素と新しい要素がまじり合っているかと思われる要素がある。

特に現在韓国の慶尚道方言の字音声調との関係などで興味深いものがあるが、それについては一切稿を改めることにしたい。

(付記) 本稿は昭和六十二年度九大国語国文学会(S 62・6・7)での発表を元にまとめたものである。御指導戴いた奥村三雄先生を始め、御教示戴いた諸先生方に謝意を表わします。